

東海地区

学校事務会報

第129号

平成31年3月8日

発行: 東海地区公立小中学校事務研究会

<http://tougaijimuken.sakura.ne.jp/>

第50回 東海地区公立小中学校事務研究大会 稲沢大会 報告



大会テーマ	学校・家庭・地域，次代へつなぐ学校事務の創生
サブテーマ	～みんなで接（つ）なぎ、育もう！子どもたちの未来（あす）～
期日	平成30年11月8日（木）・9日（金）
会場	名古屋文理大学文化フォーラム（稲沢市民会館） 稲沢市総合文化センター
参加者	1,589名(資料参加含む)



お礼のことば

第50回東海地区公立小中学校事務研究大会実行委員長 小川 卓也

平成30年11月8日と9日の2日間にわたって開催した大会には、愛知・静岡・岐阜・三重の東海4県を中心に、2日間で延べ約2,400人の皆さんにご来場いただき、盛会に開催することができました。大会2日目はあいにく雨天となりましたが、最寄りの国府宮駅からやや離れた会場まで、多くの方に歩いてご来場いただきました。皆様のご協力に心より感謝を申し上げます。また、大会の開催にあたり、ご後援とご支援をいただきました文部科学省、愛知県教育委員会、稲沢市、稲沢市教育委員会並びに、愛知県小中学校長会をはじめとする多くの教育関係団体と関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

開会式では、文部科学省 主任視学官 清原 洋一様、愛知県教育委員会教育長 平松 直巳様、稲沢市長 加藤 錠司郎様を始め、多くのご来賓の皆様にご臨席を賜り、学校教育法や地教行法等の一部改正により、学校運営参画をとおして教育への一層の貢献が求められている事務職員に対する期待の言葉を頂戴しました。

1日目の全体会では文部科学省主任視学官の清原様から、2日目の全体会記念シンポジウムでは3人のシンポジストから、学校と社会が連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実現が必要であり、学校組織における唯一の総務・財務等に通じる専門職である事務職員には、その専門性を生かしてより主体的・積極的な校務運営参画が求められていると、事務職員の役割を示していただきました。

1日目と2日目の午後に開催した7つの分科会では、東海4県各地域の研究実践報告や提案が行われましたが、そのうち4つの分科会ではワークショップが展開され、カリキュラムマネジメントや地域連携をとおした学校運営参画など、新たな学校事務の役割について、参

加者間で活発な意見交換が行われました。

参加された皆様には、大会で新たな学校事務のヒントを掴み、その姿をより明確に描いていただくことができたものと確信しております。この新たな学校事務の幕開けとなった記念すべき第50回大会を稲沢市で開催でき、次代のスタートとなる静岡県での第51回磐周・湖西大会へと引き継ぐことができましたことを心から嬉しく思います。2020年2月の次回大会で、東海各地から新たな学校事務の具体的な展開が報告されることを祈念いたしまして、お礼のことばとさせていただきます。

参加報告

全体会① 文部科学省行政説明

文部科学省初等中等教育局 主任視学官 清原 洋一氏に「これからの教育の方向性と今後への期待」と題して、教育改革のスピードが激しいなかで実施となる新学習指導要領について、今後の流れと期待されていることを説明していただきました。

わが国の現在、そして今後予想される社会に対して、これからの時代を担う子どもをどう育てるかという視点で、高大接続や初等教育改革といった中教審答申と連動したなか学習指導要領改訂は実施されることや、小学校の英語、プログラミング教育などの新しい内容が組み込まれていること、アクティブ・ラーニングやカリキュラムマネジメントによる授業改善の必要性といった新学習指導要領の概要が説明されました。続いて、人工知能と人間のそれぞれの強みを生かし、必要な情報を得て他者と協働しながら、答えのない問題に対応する力を育てること、これからの教育課程の理念は、「社会に開かれた教育課程」で目標を学校だけでなく、学校を取り巻く社会と共有し、子どもがこれからの時代を生き抜く力を、社会の多様な力を借りながら育てていくことなど、新学習指導要領の方針について話がありました。アクティブ・ラーニングについては、言葉が先行し本当の意図があいまいになっているとし、これまでの教育実践や先哲の考え方を手掛りに、あるいは地域の方との対話など、質の高いこれまでの日本教育が積み重ねてきたものを生かしながら、主体的・対話的・深い学びへの授業改善をしていくことが重要と説明されました。

まとめとして、新しい学習指導要領のねらいは「未来を拓く人材の育成」であると再度確認したうえで、「みんなで手を取りあって教育を行っていきましょう」という会場への呼びかけで説明を終えました。現在の学校は地域の防災拠点といった地域の共有資源という面もありますが、やはり主たる目的は子どもの教育であり、学校経営にかかわるには教育の知識は不可欠です。これからの教育について説明を聞くことで、改めて事務職員としてどのように教育に関わるか考える機会となりました。

(愛知支部 常任理事 名古屋市立楠西小学校 早川 数幸)

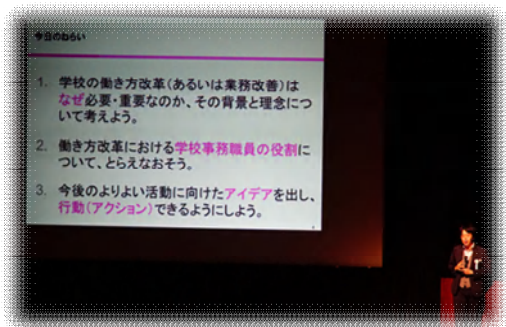


第1分科会(愛知県 研究開発部)

新たな学校事務の展開と事務職員の役割・共同実施組織の機能

—第2期スマイルプランの推進に向けて—

愛知事務研 研究開発部より「第2期あい・学校スマイルプラン」策定の経緯と、その推進に向けた具体的な取組について提案がありました。特に、新たな標準職務表や共同学校事務室の組織モデルは今後の学校事務の展開にとっても参考になるものだと感じました。



分科会後半では、学校マネジメントコンサルタントの妹尾 昌俊氏による「学校の働き方改革と事務職員の役割」と題した講演がありました。「学校事務職員への期待は大きいですが、現実には事務職員だってヒマじゃない。ビルド&ビルドの発想では限界があるので、つかさどる職としてどこに力を入れるかをよく考えないといけない」とアドバイスがありました。また、研究

開発部の発表に対しては「事務職員の強みを活かす、伸ばす改革・改善にしよう」とコメントがありました。

どんなささいなことでも常に「なぜそれが必要なのか？」という視点を持つことが業務改善においては大切だと学びました。

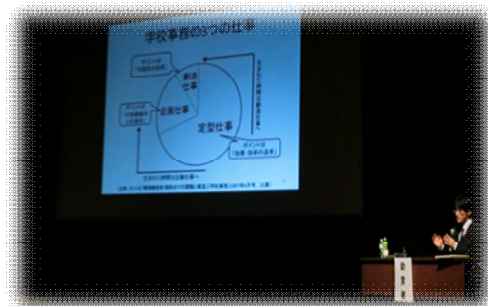
(愛知支部 常任理事 知多郡阿久比町立南部小学校 加藤 健斗)

第2分科会(三重県伊勢支部)

学校統合から学校事務職員像を考える

—みえてきた！これが私たちの目指す姿—

伊勢市では小中学校の適正規模及び適正配置化の検討が進められ、市内小中学校において学校統合が行われています。平成18年に本格実施が始まった共同実施もすでに13年目。各学校の特色や実態を踏まえて課題を解決する「教育活動を支援する共同実施」へ軸足を移してい



こうと、この学校統合を通じての実践が発表されました。そこから見えてきた課題を整理し、主体的にあらゆる場面に関わることで「つなぎ調整する」、学校の課題を提起し解決する方策を創りあげ提案する「創る」、事務職員の姿を「スクールトータルプロデューサー」と名付け、目指して前に進みたいとの心強い言葉がありました。助言者の織田先生の「自分自身の思い込みで自分で壁をつくってしまっていないか」という言葉が胸に刺さり、一步前に入るのを止めているのは自分なのかとも思いました。個性豊かな提案者と司会者で、終始明るく前向きな姿に、とても元気をもらった分科会でした。

(三重支部 桑名郡木曾岬町立木曾岬小学校 時本 直子)

第3分科会(岐阜県山口市)

子どもたちの豊かな育ちを実現する学校事務
—「研修」「連携」「スリム化」を図ることで—

山口市事務職員部会は「チームやまがた」として、山口市の小・中学校を「自分の学校」、市内に勤務する学校事務職員を「仲間」として意識され、身近な疑問や教職員の実態を踏まえた学校事務改善に向けて普段取り組まれている「研修」「連携」「スリム化」の内容を発表されました。



「研修」では、研修に参加するだけでなく企画・運営に携わることで確かな力を身に付けるために、教職員向けのパソコン研修や初任者教職員研修の講師を担当したこと。「連携」では、各校における事務業務の課題を市全体のことと捉え、やることリスト、備品貸し出しリストの活用や給食費取扱いを市内統一したこと。「スリム化」では、どの学校においても同じ様式やソフトを活用することで、学校間

の違いを抑えるために、出退勤時間管理ソフトの整備、旅費請求の適否一覧表などを作成したことを聞きました。どの内容も今後の参考になるとともに、自分自身の刺激にもなりました。

(岐阜支部 常任理事 海津市立日新中学校 小川 茂樹)

第4分科会(静岡県富士市)

楽しもう研修つなげよう子どもの笑顔
—富士山のように チーム富士市に3776 (ミナナロウ) —

富士市公立小中学校事務研究会は、小中学校全43校、県費負担事務職員50名で構成され、政令市を除く静岡県内において、最大規模の組織です。富士市も他の地区と同様に世代交代への対応が課題となっており、研修を通して、組織に必要な人材の育成と組織力向上に力を入れていました。研修は単年度で終わることなく、今までの研修を振り返り、目指す学校事務職員像と現状を見つめ、「繰り返し改善」する研修を行うことで、個の力を着実に付け、「チーム富士市」の力に還元していました。



いくつか紹介のあった研修の中でも、富士市教育研究推進会が主催する一斉授業研修会の一例に、公開授業ではない通常の授業に事務職員が参加し、課題を捉え、子どもの学習環境の改善を行った実践の発表と意見交換を行った研修がありました。子どもと一緒に授業を受

けることで、子どもの学習環境を肌で感じ、自ら課題を捉えることは、事務をつかさどる学校事務への第一歩だと感じました。

(静岡支部 研究部プロジェクト員 湖西市立新居小学校 齋竹 雅輝)

第5分科会(岐阜県飛騨地区)

4色で織りなす ひだの未来
—地域色を生かし、つなぐチームひだ—



岐阜県北部に広大な面積を有する飛騨地区は、飛騨市、高山市、下呂市、白川村の三市一村から構成されています。飛騨地区小中学校事務職員研究会は、各市村につながりを持たせる組織としての役割を担い、「チームひだ」という意識で研究活動を行ってまいりましたが、共同実施の広がりにより、各市村における取組に労力や意識が集中し、他市村との連携が希薄になってきたという状況が生じてきました。

学校数が少ない飛騨市は学校間連携を中心に、広域な高山市は事務研を母体に、下呂市は要綱に基づいた行政組織として共同実施に取り組んでいます。白川村は1村1校の義務教育学校としての独自取組となります。飛騨地区研では、それぞれの特色を認めながらも共通点を見だし、交流や研究を通して、お互いを知りそれぞれに生かすことで更なる成長につながるような、新しい形での「チームひだ」を目指して取組が行われています。

(岐阜支部 常任理事 高山市立日枝中学校 新名 正博)

第6分科会(静岡県小笠地区)

みんなが笑顔になれる事務改善
—「連携」と「協働」が未来をひらく—

小笠地区は事務改善を通して、まずは事務職員が笑顔になり、学校を取り巻く全ての人の笑顔につながっていきたいという思いで、研究を進めていました。学年会計システム作成やデータ管理フォルダ統一化を組織で行い、個人では日々の取組を発表する、課題解決のヒントを組織から得るなど、個人と組織がフィードバックし合う手法で研究を推進していることが説明されました。



グループ協議では「こんなことに困っています」をテーマに、校内会計やモチベーションなど6つの事例から選択し、共感しながらアイデアを出し合いました。他のグループ発表を

聞いたり、回ったりして自分では思い浮かばないアイデアを吸収することができました。

助言者の佐藤校長先生から「一つ一つは小さな実践でも、個人と組織がフィードバックし合い、積み重なっていくことで大きな渦となり、その渦が小笠50校の笑顔につながっていくことでしょう。」と指導講評をいただき、明日からも笑顔で仕事ができますように…そう感じることでできる分科会でした。

(静岡支部 情報戦略プロジェクト員

御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中学校 山浦 裕人)

第7分科会(三重県伊賀支部)

「いがっ子」「ばりっ子」の豊かな育ちにつながる・つなげる学校事務
—チーム学校で学校事務職員にできること 学校予算から地域連携まで—



地域や教職員との連携をテーマに実践発表がありました。

中でも、学校統合に関わり、共同実施を活用し備品・消耗品の情報共有について教職員と連携するだけでなく、統合前の学校の地域のつながりを大切にするために、ゲストティーチャーの年間一覧表の作成を事務職員が行ったという実践紹介が印象に残りました。その一覧表には、以前の学区ごとの授業内容、

講師の連絡先などを学年別に分けた内容が載っており、統合後の学校での教育活動にもつながれたと発表がありました。ヒト・モノ・カネ・情報を事務職員がうまくマネジメントをし、教育活動に寄与することができている良い事例を知ることができました。

その他にも、地域の特色を生かした予算の執行について、計画段階から地域や学校との連携が円滑に進むように校内での管理職、教職員との意見のすり合わせを行うことで学習活動により密着した予算づくりが行うことができたという実践や、予算委員会で校内の環境整備を提案し、理科室の教材・教具について教職員とともに作業を行うことで、在庫管理の簡易化に留まらず、授業準備にかかる負担軽減にもつなげることができた実践も紹介されました。コミュニティ・スクールの実践では、学校運営協議会の制度化が進む中で事務職員の経験年数に関係なく携わることができるよう、実施校の事務職員から、他の事務職員への研修や共同実施内での情報共有を行っているという紹介がありました。後半は、提案を受けてグループワークが行われ活発な討議が行われました。

明日からの実践に生かせる事例を学ぶことができ、とても有意義な分科会となりました。

(三重支部 いなべ市立員弁東小学校 柴田 智大)

全体会② 記念シンポジウム

大会2日目の記念シンポジウムでは、『「学校のマネジメントと事務職員」～共同学校事務室の好事例などから紐解く学校のマネジメント機能の強化と教職員の働き方改革の動向～』をテーマに、3人のシンポジストが着目する施策や全国の先進事例等の紹介がありました。

茨城大学准教授 加藤 崇英氏からは、学習指導要領改訂のねらいや、事務職員のキャリアマネジメントへの関わり方について具体的な話があり、「事務職員の学校現場からの発信に期待している」とメッセージがありました。稲沢市立稲沢東小学校長 武田 孝薫氏からは、「新学習指導要領について、事務職員にもその中身の理解を深めてもらい、各校で主体的・対話的で深い学びの教育を実現するために総務面の改善を提案し実践してほしい」と期待が寄せられました。愛知教育大学准教授 風岡 治氏からは、「法改正から2年が経った今、事務職員の仕事の質を転換することが問われている。企画・立案・調整・決定・判断できる事務職員になるために危機感を持ってほしい」と激励がありました。

子どもたちの深い学びの実現のために、自分にできることは何か。一度、管理職とともに校内を巡回し、授業見学を通して課題を見つけ、予算・財務面からの支援ができればと思います。

(愛知支部 常任理事 知多郡阿久比町立南部小学校 加藤 健斗)





ひろげよう実践 ふかめよう研究活動

【 研究部 】

「子どもの豊かな育ちを実現する学校事務」を研修主題とした「第8期中期研修計画」の1年目として、「協働体制の構築」をテーマに、課題解決能力を育成する研修や、つくば中央研修の還流報告を行い、会員の資質向上を図る研修を実施しました。

自主的・自律的で自由な研究活動の場である三事研組織を今後も存続させていくために、三事研のあり方について検討を行いました。

10月の研究大会では、来年度の研究大会から始まる実践レポート発表に向けて、レポートテーマの提案を行いました。

調査活動では、共同実施について県内の実施状況調査と県内支部研究状況調査を行いました。2月には、平成30年度三事研活動についてのアンケートを実施しました。また、全事研主管の5月調査と11月調査を県内各支部・各市町教育委員会の協力を得ながら実施しました。

「事務の手引」編集委員会では、学校事務に携わる者が日常の事務の手本として利用し、よりの確な事務処理を行う手助けとなるよう「事務の手引」を改訂しました。

計6回の編集委員会を開催し、12月に「追録第39号」を発行しました。また、2月に「訂正表第40号」「『事務の手引』差替、訂正確認一覧表」を配信しました。改訂は、給与条例・規則等の改正に伴うものが中心で、分かりやすく、より使いやすい手引を目指し、三重県教育委員会、公立学校共済組合三重支部、三重県公立学校職員互助会と連携をはかりながら編集を進めました。

「事務の手引」デジタル化委員会では、平成32年度からのデジタル化に向けて、「事務の手引」の入力・入力確認作業を進めました。

【 研修部 】

研修部では、研修主題の実現に向けて研究部と連携を取りながら、年2回の研修講座を企画・開催しました。三重県男女共同参画センター フレンテみえ 専門員 服部 亜龍さん、三重県立熊野古道センター 副センター長兼事務長 世古 博久さんにそれぞれの研修講座でご講演いただき、会員の方からもつくば中央研修還流報告を行っていただきました。

また、10月には第55回三重県公立小中学校事務研究大会を開催しました。1日開催で、午前中は名城大学農学部 キャリア教育研究室 教授 木岡 一明さんにご講演いただき、午後からは鳥羽支部の提案による最後の支部発表を行っていただきました。多くの方にご参加頂き、成功裏に終えることができました。

広報活動では、三事研広報を年5回発行し、研修講座の報告、全国大会や東海大会の案内や報告を掲載しました。ホームページでは、組織や事業計画、三事研広報等を掲載し、情報の発信に努めました。



「協働・創造・発信！ チームでつなぐ子どもたちの笑顔」
～ 「企画・提案型の事務職員」への変革を目指して～

愛知県公立小中学校事務職員研究会（以下「愛知事務研」）は、教職員や地域の人々とともに子どもたちの豊かな学びを実現するため、学校のマネジメント機能の強化に向け、学校事務に期待されている役割の実現のために研究を進めてきました。学校事務全体を「つかさどる」ためには、従来の事務処理作業の延長線ではなく、マネジメント全体の視点から効果的・効率的な事務のあり方を「企画・提案」していくことが必要となります。そのために愛知事務研としては「新たな職の開拓」と、その実現に必要な「人財育成」を中心課題として、特に以下の3点を重点に事業を推進しました。

1. スマイルプラン推進（組織・人・地域）

昨年度策定した、愛知における学校事務のグランドデザインとしての第2期あい・学校スマイルプランを推進するための重点目標として「チームとしての学校づくり」「地域とともにある学校づくり」「学校づくりを推進する共同実施」を掲げ、具体的展開を図りました。東海（稲沢）大会分科会では「新たな学校事務の展開と事務職員の役割・共同実施組織の機能」について発表をしました。

新たな職の開拓としては、本年度2名の事務職員が「社会教育主事」の資格取得の研修に参加をすることができました。その研修内容を共有することにより「地域とともにある学校づくり」のステップとすることができました。

また、本年度より組織体制を1局3部体制とし、スリム化を念頭に置きながらも、学校経営を支援していく観点から事務研活動の展開を図りました。

2. 周年事業、今後の県大会への対応

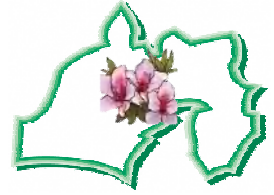
第50回東海（稲沢）大会兼県大会を大会実行委員会と連携・協働し企画・運営を行いました。また、今後の県大会のあり方について長期的な展望に立ち、分科会方式や開催地の見直しなどを進めました。

3. 関係諸機関・諸団体との協働機能の強化

人財育成のために「研修企画委員会」の再設置を関係教育機関に働きかけました。さらに、愛知県総合教育センターとの連携・協働体制を強化し、事務職員の制度研修の企画・運営に、より深く愛知事務研が関わるようになるようになりました。



また、学校事務情報交換会では、愛知県校長会役員、愛知県教頭会役員、各教育事務所の次長兼総務課長・支所長代理及び市教委関係者にご出席いただき、「学校事務職員の校務運営への参画について」というテーマで研修・意見交換を行うことにより、理解を深め合うことができました。



子どもの豊かな育ちを実現する学校事務を目指して

静岡県公立小中学校事務職員会のテーマ「子どもの豊かな育ちを実現する学校事務を目指して」を具現化するため、専門委員会・特別委員会を設置して、活動を推進しました。それぞれの活動内容は次のとおりです。

【専門委員会の活動】

I 研究推進委員会

県・地区・地域での組織的な活動を行うことにより、研究活動の一元化を図る。主に研究推進計画、全体研究構想、研究目標の策定を行い、「コスモスプラン」の会員への浸透を図りました。

- ・研究推進委員会の開催（年4回 6/22、10/12、11/16、1/18）
- ・全事研財務ウィークへの取組
- ・県大会発表の推進

II 広報委員会

事務情報の提供・会員相互の情報交換、広報誌及び研究集録の発行を行いました。

- ・広報委員会の開催（年2回 6/8、11/16）
- ・広報誌「はばたき」WEB版発行（第53、54号）
- ・静教研だより「ときめき かかわり 未来へつなぐ」への原稿提供
- ・「学校事務研究集録65号」の編集、発行
- ・ホームページの運営による情報発信、収集

III 学校事務改善委員会

学校事務改善及び研修体制改善に係わる活動を行いました。主として静岡県教育委員会等との話し合いの企画運営を行いました。

- ・静教組事務職員部との話し合いの開催（年1回 10/5）
- ・静岡県教育委員会との話し合いの開催（年1回 11/16）

IV リーダー育成委員会

主幹部の企画運営、学校事務職員リーダー育成のための各種研修会等の企画運営を行いました。

- ・主幹部研修会の開催（年1回 11/19）
- ・県外視察の企画実施

【特別委員会の活動】

I 事務提要編集委員会

「静岡県公立小中学校事務提要・諸様式」の編集を行いました。

- ・事務提要編集委員会の開催（随時）
- ・事務提要の電子データ化への取組



子どもたちの豊かな育ちを実現する学校事務 ー学校経営をサポートする共同実施の推進ー

岐阜県小中学校教育研究会事務職員部会では、「子どもたちの豊かな育ちを実現する学校事務～学校経営をサポートする共同実施の推進～」をテーマに、次の3点を重点として活動してきました。

- 1 子どもたちが安全で安心して学び生活できる環境を整えるとともに、信頼される学校づくりに努める。
- 2 つかさどる職として、積極的な職務の遂行と研究活動を通して、資質・能力の向上に努める。
- 3 学校事務体制を整備し、組織的な学校事務に努める。

今年度も学校事務体制の強化を最重点課題とし、岐阜県型共同実施（学校運営支援室）の推進と確立について取り組んできました。つかさどる職としての資質能力の向上を図るため、「学校事務共同実施（学校運営支援室）室長等リーダー研修」を実施しました。また、今年度「岐阜県版学校事務のグランドデザイン」が策定され、その周知とそこに描かれている目指す事務職員像の共有を図ることを目的として、「事務の日セミナー」で理解を深めました。この2つの研修について報告します。

〈事務の日セミナー〉

岐阜県版学校事務のグランドデザインについて研修を実施しました。特別部よりグランドデザインのキーワード“ええ顔”を生み出すプロセスに、学校事務職員が積極的・主体的にかかわること。“ええ顔”をつくるための目指す事務職員像、グランドデザインの今後について説明を行いました。その後は各グループに分かれ、ワークショップを開催しました。岐阜県版学校事務のグランドデザインに描かれた目指す事務職員像に近づくために、どのような取組や支援ができるのかをテーマに話し合いを行いました。ええ顔あふれる学校づくりを担う事務職員が、より活躍するためにはリーダー層のサポートと研究会単位での活動が必要不可欠であるという意見が聞かれました。

〈学校事務共同実施（学校運営支援室）室長等リーダー研修会〉

室長等の連携を図り、運営のレベルアップ、リーダー自身の資質向上等を目的として実施されました。

- ①教職員等中央研修受講者による伝達講習を実施しました。

リーダーとしての資質能力などについて報告しました。

- ②小グループに分かれて討議を行いました。室長のグループ、まだ共同実施を始めていないグループなど、それぞれのグループのテーマに沿って話し合い、活発な交流が行われました。

今年度策定された、岐阜県版学校事務のグランドデザインの理解・周知をメインに一年を通じた研修を計画し実施してきました。今後はこのグランドデザインに描かれている、“ええ顔”あふれる学校づくりを担う事務職員を支える研修、研究活動を行っていきます。

